

「19分25秒」

著者 引間徹

集英社 1994.01 (165p, 1200円)

紹介者:榎本博康

[紹介]

僕は大学4年生。大手企業の内定を貰って、あとは残りの学生生活を楽しむだけ。彼女とスペイン旅行だって決めている。

でもちょっと腹が出てきた感じなので、東京の埋め立て地のはずれの臨海公園までジョギングに行った。そこで片足で競歩をする男に出逢ったのだ。左足の膝から下が義足。真夜中なのにミラーグラスをかけ、ウォークマンからは強烈なリズムをまき散らし、湯気を立ててずんずんと進んでくる。

僕は彼にすっかり夢中になり、陸連のシズナミ氏と、彼をオリンピックに出すべく説得をする。そして公式記録を得るために、彼を競技会に引っぱり出すことに成功するのだが、いろいろと計画が狂ってしまう。



[感想]

皆様ご存知の通り、地雷で足を失った義足の英国人、クリストファー・ムーンさん(35歳)が、谷川真理さんの伴走で、去る2月9日の13時に箱根町役場を出発し、10日に東京の各国大使館をまわり、地雷禁止と除去作業の寄付を訴えたチャリティ・ランを行った。この小説とは何の関係もないのだが、どうしても考えてしまう。

さて、気持ちを切り替えて、小説に話を絞る。この競歩者は片足ながら、オリンピック優勝者以上の実力で歩くことができる。しかし公式の場に出ることを拒み続ける。これは一体どういうことだろうか。彼はほとんど仕事らしい仕事をせずに、(もしくは得られずに、)いかに早く歩くかを、強烈なイメージトレーニングを通じて実現していく。つまり、競歩は彼の自己証明なのだ。でもそれを人前で示すことを拒む。これは私の勝手な解釈だが、彼はなるほど競歩は早い。しかし、その他の面で全く自信がないのだ。つまり、人間として、非常にいびつになってしまった。それは彼が元々持っていた資質でもあり、事故で足を失ってから昂進したことでもある。そして彼自身が、そんな自分を深刻に受けとめている。そのいびつなままに公の場に出ることは、彼の破綻を明らかにすることとなる。彼はそれを懼(おそ)れているのだ。

でもシズナミさんは、彼自信のオリンピック出場が幻のモスクワ大会で終わってしまい、自分の夢の代替として、その男をかつぎ出そうとする。そこには、義足の男本人の気持ちはかけらもない。彼らに通底する思いはあるのだろうか

何故か、ここで世紀末文学を思い出してしまう。これは1890年代のヨーロッパの思潮である。ロマンティズムから始まった19世紀が至った袋小路であり、要するに人間精神の退廃であった。私は20世紀も物質主義の行き詰まりから、必ずや20世紀の世紀末思潮があるものと何年も前から期待していたが、それは後年の人達が名付けるものなのだろう。

19世紀末は作家達の退廃した精神世界であった。20世紀末は現実の風景の退廃である。ヤク代わりの咳止めアンプルを振りつづける少女、つまり男の妹に残酷な時代を背負わせた、ごみ

の島の人工世界が20世紀の到達点である。

そして、就職の内定をとりつけた僕は、それを蹴って競歩を日常とする世界にはまりこんでしまう。生産的な仕事を放っぼって、みんなが競歩やマラソンを中心とする生活を始めて、ここに自分らしさを見つけたなんて言ったら、社会は成立しない。あらゆる組織は、内部から滅びる。

「姿はサイボーグだが心は人間」という主旨がキャッチコピーだが、作者は沿道でサイボーグだと叫んだ子供を、その母親に打たせている。健常者は、姿は人間だが心はサイボーグかもしれない。母親には常識を代表させている。でも彼女は本質を見ようとしなない。

さて、何だっけ。そうだ、クリスだ。たまたまテレビで見かけたが、TVの画像は余りあてにならないので間違っているかもしれないが、クリスはとっても頑張ろうとする気持ちが強すぎるように思った。でも今の彼にはそうすることが一番なのだろう。そして皮剥ける時が来るはずです。

この作品はレトリックが丁寧で、いたずらに枚数を稼いだ小説とは一線を画している。プロットもしっかりしている。一生懸命に歩くほどに滑稽に見える競歩は皮肉なスポーツだ。しかし、私は日常を機軸としない作品は好きではない。また義足の主人公を戯画化してきるところも腹立たしい。

(1998. 3. 25)

[リバイバル感想]

このタイトルの19分25秒とは、5km毎のラップをこの世界記録レベルのタイムで刻み続けることを意味している。東京オリンピック・パラリンピック2020が開催されることから、現在は障がい者スポーツが注目を集めているが、それでもなかなか見かけないテーマの小説である。でも障がい者スポーツを描くのがこの小説の目的では無いように思える。では一体何がテーマなのだろうか。

この男は非現実的な存在である。競歩での驚異的なスピードと、同じく驚異的な非社会性を併せもつ存在による、ファンタジーを目指したとも思える。しかしその男を現実の競技会に引っ張り出すことで、ファンタジーはぶち壊しになる。そう、やってはいけないことをしたということか。

本書は1998年6月に文庫本化された。

(2020. 6. 22)